

こころ日記

「ぼちぼち」

(8)ルロイ先生

脇野 千恵

国語の教科書に、『握手』（井上ひさし作）という教材があります。主人公の「わたし」が、中学校3年生から入所した養護施設の当時園長だったルロイ修道士と久しぶりに会うという短いお話です。

戦前、キリスト教の普及活動にカナダからやって来たルロイ先生は、戦中の捕虜生活を経て、戦後養護施設の園長としてたくさん子どもたちを育てました。

故郷のカナダに帰る前にルロイ先生は、かつて「天使園」で育てていった子どもたちを訪ねて回ります。実はルロイ先生は、その時体中悪い腫瘍に侵されていました。そのことは子どもたちには一切告げず、一人ひとりの生活ぶりを確認して回ります。

成人式の同窓会に招かれた時のことです。

K君の場合

「先生、あの時は本当にお世話になりました！」と、ビールをつぎながら大きな声であいさつしてくれたK君。

当時彼は、二つ違いの姉と母との三人暮らし。父親とは小さい頃に離婚のために別れたままでした。甘えたで、寡黙で、しかも大人不信ときているので、とてもやりにくい生徒でした。気持ちが内向きで、自己肯定感も低く、いくらほめても「また、心にもないことゆうて」という目で返してきます。

朝は遅刻ばかり。どちらかというと、不良仲間の端っこにいては、運悪くしかられてしまう役柄でした。当時は母親の

嘆き悲しむ弱々しい姿しか思い浮かびません。

高校卒業後、今は工場勤務をしているとか。結婚もし、もうすぐ子どもが生まれると嬉しそうに話してくれました。

「先生、子育てって大変ですか？」

これから父親になろうとする喜びを隠せない表情は大人になった顔でした。

Y君の場合

Y君は、中学1年生の時に転校してきた生徒です。家族は3歳違いの妹と母親。引っ越しの理由は、母親の信仰する宗教関係によるものでした。聞くところよると父親はDVで、離婚までには色々なことがあったようです。しばらくは母親の実家に身を寄せていたのですが、全く身寄りもない街に暮らすことを選択したのは、母親だったようです。

1年生の時の担任だった私は、彼の家族の生活にとても違和感を感じていました。

信心深い母親は、教会という所で働き、学校が終わると子ども達は家に帰らず、母親のいる協会に帰ります。そこで食事や学習などすべて終え、自宅のアパートには寝に帰るだけというものでした。

Y君は、そんな生活が受け入れられず、次第に母親に反抗するようになっていきました。家では物を壊す、母親への暴力、暴言。家庭訪問に行くと、生活感のないアパートの部屋は、廃墟のように荒れ果てていました。

「神がなんや！そんなもんおるか！」

と息巻くY君は、しまいには母親を殺してしまうのではと心配したものです。

母親は何度も警察や児相に通報しましたが、うまくいきません。やがて、深夜徘徊、バイクの窃盗など、転がるように悪くなっていきました。母親は、早く捕まって保護してほしい、できるなら施設送りにと、学校に懇願してきました。学校側は、相変わらず14歳にならないと…と、わけのわからない返事をするばかりでした。

残念なことに、14歳になった彼は鑑別所、そして児童自立支援施設送りとなりました。担任ははずれましたが、彼の様子を見に施設を訪れたとき、

「元気にやってます」

と、寡黙な彼は答えてくれました。

学習能力の高い子でしたので、地元に戻ってから普通高校に入学しましたが、やはり色々な悪い誘いを断ることはできなかったようです。

久しぶりに見た彼は、スーツ姿でした。やはり寡黙でしたが、家で暴れていた頃のあの目ではありません。今は、肉体労働をしているとか。

「高校中退後、少年刑務所に入っていたんです。その保護観ももうとれたし、今彼女と一緒に暮らしてます」

今の世の中、彼の暮らしは決して楽ではないでしょう。しかし、あんなに嫌われていた母親から自立していると思うと、ちょっと嬉しくなりました。

その横でT君が、

「先生、こいつ、だいじょうぶやで。ち

ゃんとやっとなるし」

その言葉を聞いて、とりあえずよかったと思いました。

H君の場合

この子も中学1年生の時に転校してきました。担任をしたのですが、入学式の日から、無表情で教師をなめたような様子に、これは手ごわいかもと思いました。

H君が転校してきた理由は、彼自身の素行の悪さからでした。

小学校高学年から、窃盗や火遊び、恐喝など一通りのことは経験してきたようです。母親泣かせの子で、兄弟の中でも手のかかる子だったようです。

両親と4人兄弟の家族で、彼は2番目でした。両親は、彼の荒れがあまりに止まらないので、できるだけ我が子を悪い環境から遠ざけようと、ネットで学校探しに奔走しました。

ここなら大丈夫と選んだ学校に通い始めた彼でしたが、両親の思いとは裏腹に再び荒れが始まったのです。Y君と同じように、14歳の夏休み鑑別所に。卒業後は普通高校に入学し、何とか卒業することができました。

粗暴で口が悪かった彼も、やはりスーツ姿でした。本当に手のかかった子ほどかわいいと言いますが、彼のいたずらっぽい表情は、昔と変わらないものでした。「お久しぶりです。この前まで、トヨコの期間工で働いていました。今は…まだ

仕事見つかってないっす。高校出てから、少年刑務所にちょっと入ってたんやけど、もう大丈夫です」

そうか、色々苦労してるのだなあと辛くなりましたが、元気な姿に安心しました。

中学校を卒業して5年。

普通に高校生活を送って就職した者、大学生活を楽しんでいる者。一人ひとり違った道をそれなりに歩んでいることを確かめることができました。H君やY君などは、特にどうしているのかと気にかけていただけに、同窓会で出会えたことに感激です。

こんなこと言っただけでは何ですが、紆余曲折を経験した子は、なかなか同窓会へは行きにくいものです。しかし、彼らは中学校時代から仲間意識が強く、今でもそういった繋がりを大切にしていることが分かりました。

『握手』の中のルロイ先生に、「わたし」が尋ねます。先生が日本で暮らしていて、一番嬉しいと思ったことは何ですかと。

ルロイ先生は、「天使園」の門の前に捨てられていた赤ん坊だった川上君の話をします。今、彼が立派にバスの運転手として働いている姿を見るのが、一番嬉しいと。そして一番悲しいのは、自分の子をまた「天使園」に預けに来ることだと言います。

私は、いつもこの教材を扱うたびに、ルロイ先生の思いに自分を重ねてしまいます。どの子もそれなりに幸せと思える人生を歩んでほしいと。

ルロイ先生の「困難は分割せよ」という言葉が出てきます。中学生の子には少々解釈に難しい言葉ですが、もう大人になってしまった教え子たちですが、改めてこの言葉を思い出してほしいなと思いました。

同窓会からしばらくして、ドーナツを買いに行くと、Tさんが働いていました。同窓会では、きれいに着飾っていたTさん。レジに立つ彼女は、社会人の顔です。

「先生、こんにちは！最近この店に転職になったんです。また買いに来てくださいね」

そうか転職もあるんだ、頑張っているなと我が子のように嬉しくなりました。

昔々に卒業させた子どもたちも、街のあちらこちらで働いています。最近、お店のスタッフの名前を確認することがよくあります。ひょっとして教え子？教員はプライベートを知られたくないといやがりますが、頑張っていることにエールを送りたくなります。

例えば量販店ではたらくFさん。姿がないとどうしたのかなと心配です。洋菓子店はたらくSさん。店に入る私を見つけると、真っ白なコック姿で走って出てきてくれます。「いつもありがとうございます」。彼女の笑顔は、昔と変わりません。好きな仕事を選んだのだなということが伝わってきます。

私も、そろそろ教育現場からの引退を考え始めています。今までたくさん子どもたちが私の前を通り過ぎていきました。子どもたちのその後が気にかかるのは、ルロイ先生と同じです。

(中学校教員 脇野千恵)